

天保圖方太郎全集

第五卷

久保田万太郎全集

第五卷

久保田万太郎全集 第五卷

昭和五十年六月一日印刷
昭和五十年六月十日發行

著者 久保田万太郎

著作權者 學校法人慶應義塾

發行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目一
電話(五六一)五九二一
振替東京二二三四
©一九七五 檢印廢止

久保田万太郎全集 第五卷

目次

遊戯

九

Prologue

二二

暮れがた

翌

雪

五九

水のおもて

七四

宵

一〇三

宵の空

一一三

花の空

一二七

彼のみたもの

一五九

ひとりむし

一七六

晝面

一九

祭の出来事

二〇三

雨空

二一五

四月盡

二三一

心ごころ

二四九

冬

二七七

あぶらでり

三二一

不幸

三五四

短夜

三七五

露深く

三九三

月夜

四三九

舊友

四四七

通り雨

四七〇

招待券

あとがき

四八五

四九五

戲曲

一

遊 戲

海濱の旅館……遊戯室

遊戯室……廊下……庭。

廊下から見える庭は、遠く午後の海を隠した松林の風情。近くに垣があつてそこにも松二三本。日盛りを過ぎた午後三時過ぎ。客は皆海へ行つた留守で、蟬が暑苦しく鳴いてゐる。空は美しい藍色で風がない。

遊戯室にはピンポンの卓、椅子が二三。政子(十二三) 莊作(二十三四)ピンポンをしてゐる。英一(二十四五)少し離れて句集を読む。

舞臺は明るくて静かである。白日の夢に酔うたその静けさに、ピンポンの球の軽い音ばかり高い。長い間。

信吉(二十八九)登場。

(四人ともその少し以前に海から歸つて来たばかりで、皆或る疲勞を覺えてゐる)

信吉 また拙いのがやつてゐるな。

莊作 もう平凡で／＼お話にならないんです。

政子 あんな事いつて、狡イばつかししてゐる癖に……ほんと

に莊作しやうさくさんはずるいのよ。

莊作 何をいつてるんだい。そらどうだ Three-two

政子 あら貴方が Serve ちゃありませんか。

莊作 さうだつたかな。ちやあ Two-three

登場人物

政子 少女

おきぬ 政子の母

澤莊作 青年

島田英一 青年

生田信吉 工學士

森貞三 銀行員

吉村友吉 商人

おのぶ 女中

阪東鶴五郎 旅の役者

尾上梅之助 都の役者

避暑客數名 宿の女中數名

場所

政子 くやしい。Deuce に見せるわ。ほら。

莊作 (落ちたる球を拾ふ) やつとの事で Deuce か。氣の毒だな。……一に橘、二に杜若、三に下り藤、四に獅子

牡丹。(鞠唄を唄ふ)

政子 文句ばかりいつてるのね。早くおやんなさいよ。

莊作 五つゝ山の千本櫻、六つ 紫色よく染めて、ね。

信吉 政ちゃん、莊作さんにごまかされちゃいけないよ。

(英一の方に寄り) 英ちゃん勉強だね。

英一 え、かういふものを讀んでるんです。(見せる)

信吉 芭蕉句集……へえ、君はやるんですか。

莊作 やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲、と……それ Van-tage in だ。

tag in だ。

政子 あら、ずるいわ、莊作さん。

莊作 五つゝ山の千本櫻、六つ 紫色よく染めて。(構はず笑ひながら唄ひつゞける)

政子 (落ちたる球を拾ひながら) 生田さん、あなた、昨夜の

芝居、仕舞まで見て。

信吉 見たとも、政ちゃんは見なかつたんだらう。

政子 だつて私、眠くつて仕様がなかつたんですもの。

莊作 なんだ、あの面白いものを見なかつたのか、厄介な人

だな。

政子 でも私あすこまで見てよ。あの權太が殺された所まで

見てよ。

莊作 あれからが面白かつたんだ。辨天小僧でそりやあ面白かつた。ねえ生田さん。

信吉 うむ、面白かつた。だけど莊作さんに演らしたら、あの役者たちよりもつと巧いだらう。

莊作 そりや巧いもんですつて。……濱の眞砂と五右衛門が、つてね。(笑)

英一 (句集より眼を離して) ピンポンより巧さうだ。

政子 莊作さん、どうしたの、もうしないの。

莊作 もう止さう。

政子 ずるいのね、負けさうになつたもんだから止さうなん

つ。

信吉 あの役者たちは今夜もやるのかしら。

莊作 もう昨夜つきりなんでせう。もう皆今朝立つてしまつ

た筈だ。

政子 うそよ。未だあの座頭の役者だけ残つてゐてよ。先刻

帳場の所にゐたわ。

英一 旅役者の生活なんて面白いもんだな。

莊作 昨夜こゝで芝居をやつたのが今夜はもう外の土地へ行つてゐる。そこで二日か三日芝居をして、またその先の

土地へ行くんだ。

信吉 萍のやうなもんだね。

土地へ行くんだ。

信吉 萍のやうなもんだね。

英一 二度ともうあの役者たちの芝居、おそろく見る事ないだらう。

(聞)

莊作 政ちやんはいつ歸るんだ。

政子 何日つて、嫌よ。私まだ何日歸るなんて考へてゐやあしないわ。

信吉 おつ母さんが、政子は言ふ事を聞かないからもう連れて歸るつていつてゐたよ。

政子 嘘。

英一 政ちやんは東京へ歸りたくないかね。

政子 歸りたい事もあるけれど、歸りたくないわ。

莊作 歸りたい事もあるけれど、歸りたくないなんて曖昧な事をいふね。

政子 曖昧な事ぢやないわ。

(聞)

政子 (小音で) 三に下り藤、四に獅子牡丹、五つゝ山の千

本櫻。

莊作 六つ紫色よく染めて、七つ南天、八つ山櫻。

英一 (つぶやく様に) 暑いな。

莊作 暑いね。全く暑い。何だかぐつたりして仕舞ふ。

信吉 今日なんか東京にゐたら堪らないだらうね。

政子 もう一度演へ行きませうか。

莊作 濱へ行つて騒いだら何にもなりやしない。それより晝寝でもする方がよさうだ。

信吉 晝寝もいゝが夜眠れなくつてね。一昨日の晩か、酷い目にあつた。戸を締めてしまつたもんだから暑くつてね、

それに波の音は耳につくしき。なんでも二時過まで蚊帳の中で團扇を使ひづめたつた……それより松林の中を歩いたらちつとは涼しいだらう。

莊作 それはよござんすね。行きませう。行かうぢやありませんか。

信吉 政ちやん、行くだらう。

政子 行きませう。

莊作 行かないといつたら、もう、遊んでやらない。

信吉 英さん、どうです。

英一 お供しませう。(本を懐へ入れる)

政子 私、鳥渡おつ母さんに斷つて來ますわ。

政子、廊下を馳け出して退場。

信吉 元氣のいゝ子だね。

莊作 あの子にからかつてゐると退屈しませんよ。

英一 よくお母さんに似てゐますね。いまに美人になりますよ、きつと。

莊作 下町に育つたゞけにはきくしてゐます、山の手あたる家庭に育つたのではあゝは行きませぬ。

信吉 かりやつて大きな者の間に這入つて遊んでゐるのが非常に嬉しいんだね。

英一 莊さん、演藝會に一つ政ちゃんを相手に芝居をやつたら好いだらう。

莊作 演藝會？ そんな話があるのかい。

英一 何だか、昨夜芝居を見てゐる中に、六番のお客がひだして、今度は一つお客の演藝會をやらうと騒いでゐた。

信吉 うむ、そんな事聞いた。あの子を相手に一つ、おかる勘平でもやり給へ。

莊作 道行ですか。

信吉 あの子はあれで踊の素養なんかもあるんだらうね。

莊作 あるでせうよ。何でも長唄なんか堂に入つてるとおのぶが言つてゐました。

英一 おかる勘平をやるんなら、件内はあの森さんにたのむといふ。

信吉 其奴はいふ、適役だ。(笑)

政子。母親のおきぬ(三十四五)と一緒に登場。

政子 お待遠様、さあ行きませう。

おきぬ 毎度どうも恐れ入ります、色々お世話様になりました、優しくして頂くもんでご座いますから、好い氣になります、まして、お邪魔ばかりいたします。

信吉 いえ、どう致しまして。失禮ばかりいたして居ります。

今松林の方へでも散歩に行かうと思ひましてお誘ひ申しました。

おきぬ 有難うございます。お邪魔でございませうが、どうぞお連れ下さいますやうに。お蔭様でも倦きずに居られますでございます。もうその内、是の父も參るでございませうが。

信吉 あゝ左様ですか。お蔭様で私共もいゝお友達が出来、退屈いたしません。今も話してをつたのですが、お客ばかりの演藝會の計畫があるさうですから、それに政子さんのお輕で莊作さんに勘平をやらせようかといつてをりますんで。(笑)

おきぬ 左様でございますか。それは是非拜見さして頂きませう。(笑)

政子 早く行きませうよ。

信吉 ちやあ出掛けませう、奥様あなたもお出でなすつては如何です。

おきぬ 有難う存じますが、鳥渡しかけた用事がご座いますから、政だけお願ひ申します。

信吉 左様でございますか、では又、ちやあ出掛けませう。(廊下へ出る)

政子 あたし、こゝに草履があるのよ。

莊作 ちやあ是からお下りなさい。僕等は玄關から廻ります

から。

政子 あら、またお客様がきてよ。(庭の彼方を見る)

莊作 おゝ、俵が二三臺着いた。

信吉 いや、賑やかにあります。

おきぬ 結構でご座います。……では、どうぞお願ひ申しませう。

信吉、莊作、英一、玄關の方へ廊下より退場。政子、

廊下より庭に下りる。

廊下の奥、急に騒がしくなつておのぶ(二十四五)を

先に今着いた客の吉村友吉(四十七八)尾上梅之助

(二十四五)荷物を持つた女中二人登場。

おのぶ どうぞ此方へ……(廊下に立つてゐるおきぬの側を

通る)ご免遊ばせ。

おきぬ お邪魔様。

友吉 (おきぬの顔を見て)やあ、喜多川の奥様ぢやああり

ませんか。

おきぬ まあ、吉村さん。

友吉 是はどちらも。貴方がこゝにいらつしやるとはちつとも

知りませんでした。おゝ政ちゃん。

おきぬ 政や、吉村の小父さんですよ。お組ちゃんはお連れ

になりませんので。

友吉 實はね、二三日前に大磯へ行つたんですが、ごたゝ

してゐて遊ぶも何も出来ないで、急に此方へ来る事になりました。家内も組も二三日中には来る筈になつて居るんです。貴方がいらつしやるんなら、今夜にでも電報をうつて早速呼びませう。とにかくこれはいゝ都合でした。

莊作 (垣の彼方よりの聲)政ちゃん、政ちゃん。

おきぬ 皆さんが呼んでいらつしやるから、失禮してお出で

なさい。

政子退場。

友吉 ほんとに大變にいゝ都合でした。ぢやあ兎にかく座敷

へ落付いてゆつくりまたお目にかゝりませう。

おきぬ いづれ後刻伺ひます。私共は二階の二番の部屋で

ございます。

友吉 こゝは閑静で好うござんすなあ。

おきぬ 二階から見ますと、海が一目でございます。

この對話のうちに女中は荷物を運ぶ。

おのぶの案内で友吉、梅之助退場。

おきぬも一緒に話しながら退場。

舞臺暫く空虚。

日脚やゝ傾いて蟬が澄むやうに鳴く。客二三人、海より歸つて来る。女中が廊下を通りかゝつて挨拶する。

阪東鶴五郎(四十二三)登場、遊戯室を覗いて見て誰

もゐないので中へ這入る。

おのぶ、後より梅之助登場。

梅之助 姐さん、姐さん、あの、お湯はあいてゐるんでせうか。

おのぶ お風呂でございますか。只今申し上げようと思ひましたので御座います。空いて居りますからどうぞお召し下さいまし、只今ご案内申します。

梅之助 どちらですか……教へて下されば。

おのぶ 左様でございますか。そちらでございます。そこをお曲りになりますとすぐでございます。

梅之助 さうですか。俵の上ですつかり砂をかぶつたもんですから。

おのぶ 左様でございますか。どうぞこゆつくりお召しなすつて。

梅之助 有難うございました。

梅之助退場、おのぶ其儘行かうとすると室の中から鶴

五郎が呼ぶ。

鶴五郎 おのぶさん、おのぶさん。

おのぶ おや親方、こゝにゐたの、私さつきから探してゐたんですよ。

鶴五郎 さうかい。そりやあ濟まなかつた。昨夜遅かつたも

んだから、今奥で一寢入さして貰つてゐたんだ。

おのぶ 私、知らないもんだから方々探したのよ。

鶴五郎 それは濟まなかつた。……ときに今そこでお前と話してゐたのはお客様かい。

おのぶ あれ？ あれは今お着きになつたばかりのお客様よ。

鶴五郎 さうか。先刻から見てゐるのに、どうも見た事のあるやうな男なんだけれど。

おのぶ あれ矢張り役者衆か何かやあななくつて。

鶴五郎 役者だよ。どうも知つてる男に違えねえんだけれど。

おのぶ 親方、本當にあんた、今夜立つの。

鶴五郎 立つとも。いつまでさうぐづぐづ、しちやあゐられねえ。外の奴等先へ立たしてあるんだから、遅くも明日の

朝は顔を揃へて町廻りをしなくつちやあならねえ。明日の

晩からすぐにまた一と芝居打つんだ。……時にもう何時だらうな。

おのぶ さうね。かれこれも四時だらう。……何だか私、

親方に話したい事がたくさんあるんだけれど。

鶴五郎 (それに答へず) もう四時か。ちやあもうそろく支度しなくつちやならない。

おのぶ 私、ほんとにあんたに……。

鶴五郎 詰らない洒落はいはない事にしようぜ。

おのぶ 戯談ちやあない、私はしんけんなんだよ。

鶴五郎 話があるなら今度来た時間かうよ。

おのぶ 今度？ 今度つて今度は何日來るの。